

序

本書の企画は羊土社編集部の「東京5大学勉強会について教えてください」の一言から始まった。東京5大学勉強会とは“胆膵内視鏡を始めた若手の先生のためにERCPを中心とした胆膵内視鏡の基本手技をとことん議論する”ことを目的に5年前に自主的に作った研究会である。5大学には杏林大学、昭和大学、帝京大学、東邦大学、そして東京医科大学が含まれる。一般に胆膵内視鏡手技の修得は難しいとされ、昔は“先輩の手技を盗め”的な教えが多かったが、昨今の医療を取り巻く厳しい状況を鑑みるとそのようなことを言っている場合ではないことは明らかであろう。本会では胆膵内視鏡基本手技の修得を目指して、各施設の手技を毎回内視鏡・X線画像のみならず時には実際の手元の操作画像を理論的に動画で解説し、納得するまで（時にマニアックなほど）議論を行っている。例えば第1回のテーマは“スコープ挿入から乳頭正面視まで”であったが、このテーマで2時間も白熱した議論が行われた。

その勉強会もすでに5年を経たが、自主的な勉強会であるが故に多くの方々のサポートなしでは継続が困難であった。第1回目よりわれわれの主旨に賛同してくださったポストン・サンエンティフィック ジャパン社のご協力により会場および研究会後の意見交換会に本社会議室を使わせていただいております。また準備や研究会の進行においても多くの社員の方々に協力していただいております。

本書はこの東京5大学勉強会が5周年という節目を迎えたことから、これまでのまとめを是非形にしようというわれわれの思いと、その話を伝え聞いた羊土社編集部の思いが合わさって実現するに至った。本書の企画コンセプトは“初心者から中級者のための胆膵内視鏡の基本と応用”であったが、そのコンセプトどおり、内容は高度な手技は避け、基本的な手技を中心に書かれている。その手技の解説と併せて何よりも魅力なのは多数の画像を収録したDVDの付録であろう。本書では5大学関連の筆者のほかに勉強会で講師としてお招きした先生方にも執筆と動画をお願いした。いずれの内容もそれぞれの章で完結しており、どこから読んでも理解しやすい内容となっている。またコラムでは勉強会御意見番の両角克朗先生にERCPの温故知新を、米国で活躍されている深見悟生先生には米国における胆膵内視鏡のトレーニングを解説していただいた。この領域は未だ標準化は困難であるものの、基本となるエッセンスはそれほど大きな違いはない。本書からは是非自分にあったエッセンスを吸収していただきたい。

最後に、本書の企画は加藤美慈氏、制作は溝井レナ氏が担当された。非常にタイトなスケジュールであったが、当初予定していたJDDW2008での発売にこぎ着けたのも溝井氏のおかげである。この場をお借りして改めて企画、発刊に尽力された両氏に感謝の意を表したい。

2008年9月

糸井隆夫